

たかさ「史話」55 く阿弥陀共同墓地の石造五輪塔く

播磨国印南郡に属し、山陽道の阿弥陀ガ宿として知られる現在の阿弥陀町周辺には、数多くの中世石造物が残されています。造立された年を示す「紀年銘」を刻んだものに限っても、阿弥陀共同墓地の文保二年（一一三一八）の石造五輪塔と康永四年（一二四五）の石造地藏菩薩像。墓地への旧道沿いに位置するとされ、家型石棺蓋石の内側を加工して造られたとみられる文安四年（一四四七）の石造地藏菩薩像。大日寺境内にある暦応五年（一三四二）の石造五輪塔と永正四年（一五〇七）の石造阿弥陀如来像。さらに時光寺の境内にある康暦二年（一一三八〇）の石造宝篋印塔（『兵庫県史』史料編中世四「金石文」・「兵庫県金石文年表」による）。

有力な家長層の台頭を示すとされ、六世紀後半から七世紀初頭に最盛期を迎える群集墳から近現代にいたる墓地群が存在し、右に紹介したものが外にも中世に遡りうる石造品が大切に保存されています。中でもその入り口近くに立つ右に紹介した石造五輪塔は、市内最古の紀年銘を持ち、地の元竜山石を用いて造られた高さ約二メートル二十五センチを計るもので、良好な形で保存されています。五輪塔は、密教の五大思想を表わしたもので、上から宝珠形の「空」、半球の「風」、三角の「火」、球形の「水」、方形の「地」からなっています。銘文は、基礎にあたる「地」に刻まれるのが一般的で、この五輪塔でもその一面の向かって右に造立の趣旨を

示す「右、志は法界衆生のためなり」（原漢文を読み下し）、向かって左側に「文保二年戊午七月十五日」と「一結衆」などと記されており、鎌倉時代末期にこの地に住む「一結衆」とよばれる念仏信仰で結ばれた人びとの手によってこの五輪塔が造立されたことがわかります。そして、七月十五日が祖先の霊などを祀る盂蘭盆にあたっていることもあわせて考えると、当時の民衆の日々の信仰を知るうえで貴重ながかりを与えてくれるものともいえるでしょう。

（市史編さん専門委員

梶木良夫）



▲阿弥陀共同墓地の石造五輪塔